

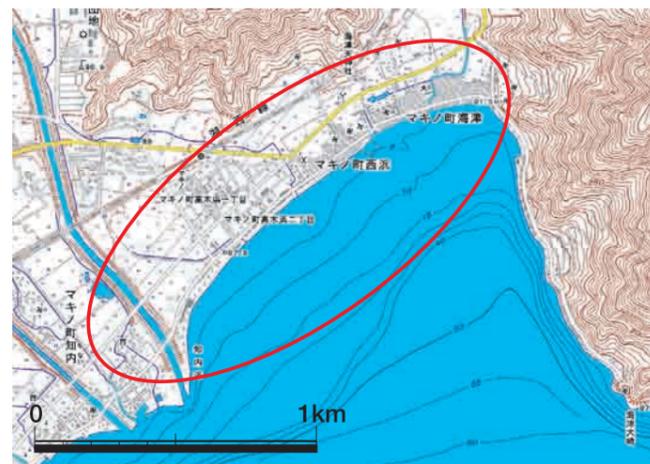
周辺の
みどころ

海津の西北、栗園で有名なマキノピックランドを縦貫する道沿いに、延長2.4kmにわたり、約500本のメタセコイヤが植えられている。この歴史は比較的新しく、昭和56年に「学童農園マキノ土に学ぶ里整備事業」の一環として植えられたのは始まりで、その後、地域の方々の手に守られ、今日のような雄大な並木となった。

四季折々に様々な装いを見せるこの並木は、今や滋賀を代表する景観として「新・日本の街路樹百選」に選ばれるまでになっている。また、有名ドラマの背景を彷彿させるとか…。



ピックランドのメタセコイヤ並木



【アクセス】

- JR湖西線マキノ駅下車、琵琶湖に向かって徒歩約15分

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】
(関連文献/関連施設)

- 高島市海津・西浜・知内地区文化的景観保存活用委員会『「高島市海津・西浜・知内の水辺景観」保存活用事業報告書』

海津・西浜・知内の水辺景観

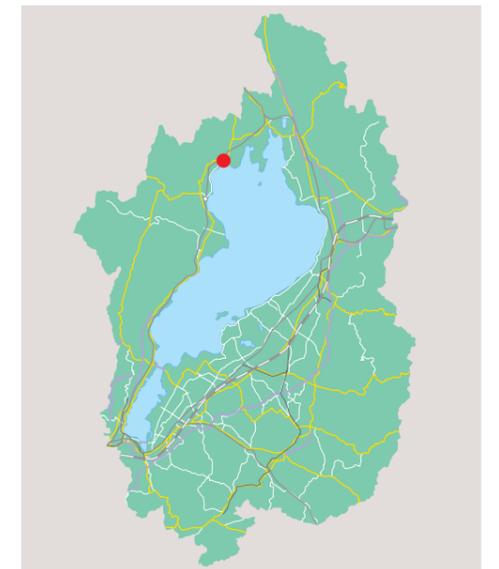
高島市マキノ町海津・西浜・知内



橋板に乗り琵琶湖で洗い物をする

海津・西浜・知内地区は、日本海方面からの物資を大津に運び出すための要港として繁栄した。その有様は、街道沿いに残る建造物群や、集落を琵琶湖の風波から守るために築かれた壮大な石垣などに残されている。また、琵琶湖や知内川では、今なお、アユ漁を中心とした漁業や、琵琶湖の水を利用した生活が継承されている。

ここには、琵琶湖と共に生き、歩んできた先人が残した文化と、ここから生まれた美しい景観が色濃く伝えられている。





海津の街並み

海津・西浜・知内の水辺景観

所在地 高島市マキノ町海津・西浜・知内

琵琶湖の要港

海津は、琵琶湖と内湖の間に発達した自然浜堤に発達した集落で、日本海を経由し敦賀に陸揚げされた物資や、ここで生産された石灰等を、琵琶湖の船運を利用して大津に運ぶための要港として繁栄した。船底の浅い船しかなかったこの時代、港は、波の影響を受けやすい湖岸ではなく、内湖から流れ出る小河川や、波穏やかな内湖が利用されて来た。

特に、江戸時代には敦賀からの「七里半越」による物資の集積地として大いに繁栄した。この事を物語るように、海津中村町の一部は加賀藩領となり、江戸時代初期には30万石もの加賀米が海津から大津に運ばれたという。

街並みと石垣

水陸両面の貨客輸送の機能を担ったことから、港や宿場としての機能に加え、多様な経済活動が営まれ、今なお、醸造業を始めとする伝統的な産業が息づくとともに、街道沿い

には商家の名残を伝える建物が多く残されている。

この地区の景観を特徴づけるものに湖岸に築造された長大な石垣がある。ここは、琵琶湖の幅が最も広いところであり、湖岸に発達した集落は、絶えず、琵琶湖の風波による流失の危険にさらされていた。この石垣は、住民の難儀を解消せんがため、元禄16年(1703)幕領代官西与一左右衛門の尽力により築造が始められ、以後、修復を繰り返しながら現在に至っている。その距離は1.2kmにもおよぶ。

水の恵み

琵琶湖に寄り添いながら生きてきたこの地域には琵琶湖と共生する生活文化が色濃く伝えられている。例えば、ちょっとした洗い物を琵琶湖でするための「橋板」と呼ばれる棧橋が、琵琶湖に向いあちこちに置かれている。ここでは、畑でとれた野菜の泥を落としたり、食器の下洗いをしたりする。一見、琵琶湖を



海津の石垣とオイサデ網漁



知内川のカットリヤナ

汚しているようにも見えるが、流された自然のゴミは魚の餌になる。過度な汚染は許されないが、琵琶湖の持つ浄化力の範囲の汚染は、むしろ琵琶湖の命を育むものとなる。

また、この地域はアユの生息に適しており、今なお、盛んにオイサデ網漁や知内川でのカットリヤナ漁など様々なアユ漁が行われており、個性的な景観を形成している。ここで

いうアユとは、無論、琵琶湖特産のコアユである。これらの伝統的な漁は、何れも、魚が来るのを待って獲るもので、持続的に恵みを受け取るため、乱獲に対する自制が働いている漁法である。

「橋板」も「アユ漁」も琵琶湖の恵みを謙虚に受け、これと共生し、末永くこの関係を続けてゆこうとする先人の知恵を今に伝えている。